待降節第４主日

福音朗読　ルカ１・39-45

2024.12.22　7：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

わたしたちは今、待降節、主のご降誕をお祝いするクリスマスを待ち望む期間を過ごしています。

主がお生まれになることを待ち望むというその心は、イエス様ご自身はもう既に 2000 年前に人となってこの世に来られたわけですから、そしてまた、一つは待降節の間はこの世の完成の時に再び来られることを待ち望むという思いですけど、もう一つは一人ひとりの中に来てくださる、そのことを待ち望み願う、そしてその一人ひとりの中に来ようとされるイエス様に心を開くという、その思いを新たにするという期間でもあると思います。

今日の福音の中では、マリア様がやって来て、そしてマリア様を迎えたエリザベトが喜びました。これは、マリア様自身というよりは、その福音の言葉が語っているように、マリア様のお腹の中にいるイエス様を迎えた喜びなわけです。エリザベトはマリア様の挨拶の声の中に既に救い主の声を聞いたという、そのことを福音書は伝えていると思います。もちろんそれは音声としての声、マリア様の声とイエス様の声が重なって聞こえてきたということではないです。マリア様の声や表情や態度、その中にイエス様が人々にこれから伝えようとされる「互いに愛し合う」という、そのことが実現している。それをエリザベトが感じとったっていうことなんだと思います。

わたしたちが一人ひとりの中にイエス様をお迎えするということは、わたしたちの行動や態度や、あるいは表情、いろんなことが相手にとって愛を伝える、そういうものになる。そういうことなんだと思います。

時々は逆の場合があります。一人ひとりの声、言葉や態度の中に悪魔の声を感じとる、もちろんそれは声ではなくて、悪意とか、あるいは相手を軽蔑するその思いとか、そういうものがたとえ表現や、たとえ微笑んでいても、また言葉は柔

らかかったとしても、しかしその中にある軽蔑や敵意、そういう悪意が伝わっていきます。わたしたちはそれを感じとります。そういう柔らかな布にくるまれながらしかし鋭い刃物を掛け合うということではなくて、わたしたちの中にイエス様ご自身の愛が一人ひとりを通して互いに伝わっていくことを待ち望むし、それを改めて思い起こす。そのために神様の助けを願う心を開くことができるようにということを、毎年毎年心新たに祈る必要があるのではないかと思います。

またもう一つは、エリザベトがこのマリア様の中に救い主の到来を感じるために、洗礼者ヨハネが既に働いているということも忘れてはならないわけです。そこに神様の導きがある、あるいはイエス様がいらっしゃっているということを預言者として表すのは洗礼者ヨハネですけれども、もう既に、お母さんのエリザベトのお腹の中にいるときからその役割を洗礼者ヨハネも果たしていた。

わたしたちも、今度は自分の中にイエス様をお迎えするだけではなくて、いろいろなこれから出合う出来事や、いろんなことの中に神様の導き、救いの御業（みわざ）を感じとっていく、そのことも大切なわけです。そういう意味では洗礼者ヨハネに助けていただきながら、自分の思い通りになるということの中だけに神様の恵みを感じるのではない、出会う人の心の中に、またいろいろな出来事を通して、死と復活を通して導こうとされる救い主の御声の御業を感じとる必要もあるわけです。

わたしたちが、一つには一人ひとりの中に救い主をお迎えしてマリア様のようにその愛を運んでいく道具となることができるように、また一方で神様がいろいろな人やいろいろな出来事を道具としてわたしたちを導こうとされる、その神様の導きの御声を感じとることができるように、聞き分けることができるように、洗礼者ヨハネの助けも求める必要があると思います。

そのようにして、ただ行事の準備ではなく、一人ひとりの中に神様を、イエス様を迎え、またわたしたちを通して、わたしたちに対していろいろな形で導こうとされる神様の御業を聞き分けていくことができますように、イエス様の恵みとそして洗礼者ヨハネの取り次ぎを願いながら、このごミサを通して互いに恵みを願い合いたいと思います。